

就職に関する意識調査の結果を公表(富山大学)

2017年7月

富山大学地域連携推進機構地域連携戦略室（室長・金岡省吾教授）は、平成29年4月に同大学の学生を対象に実施した就職に関する意識調査の結果を公表した。

意識調査は、学生の地域定着を目的とした文部科学省COC+事業の一環。富山県内の地方公共団体や企業・団体等から講師を招いて富山の未来を考える地域志向の教育科目「地域ライフプラン」を履修した人文学部、経済学部の2年生168名を対象に実施した。回収数は162名（回収率：96.4%）、有効回答数は157名（有効回答率93.5%、男性89名、女性68名）だった。関根道和（地域連携戦略室教授）、尾山真（COC+統括コーディネーター）、定村誠（COC+連携推進コーディネーター）の3氏が分析した。

調査結果では、富山県内の就職先に魅力を感じる人は全体の51.6%だった。出身県別にみると、県内出身者の85.7%が県内の就職先に魅力を感じていたのに対し、県外出身者は36.1%で、2倍以上の開きがあった。また、県内出身者のうち63.3%が大都市圏の就職先にも魅力を感じており、県内出身者は必ずしも県内での就職を志向しているわけではないこともわかった。

就職先を決める際に重視する項目を尋ねたところ、県内出身者、県外出身者とも、自身の特性が生きる将来性のある安定した仕事を重視する傾向がみられた。また、県内出身者と県外出身者を比較すると、県外出身者は県内出身者と比べて都市部での就職を重視する傾向があった。また、県外出身者は県内出身者よりも、グローバルに活躍できることや、将来責任ある地位につくことができることを重視していた。県内出身者は、県外出身者よりも、家族の意向を重視する傾向があった。

富山県では、有効求人倍率が全国平均より高い水準が継続しており、平成29年5月の有効求人倍率は1.78倍（全国平均1.49倍）だった。富山県の人口減少や人口流出による人手不足が地域課題となっている中、こうした若い世代の意識を考慮した取り組みが重要となる。地域連携戦略室では、この結果を参考にさらなるCOC+事業の充実を図っていく。

図1 県内出身者と県外出身者では県内就職に対する意識が大きく異なる

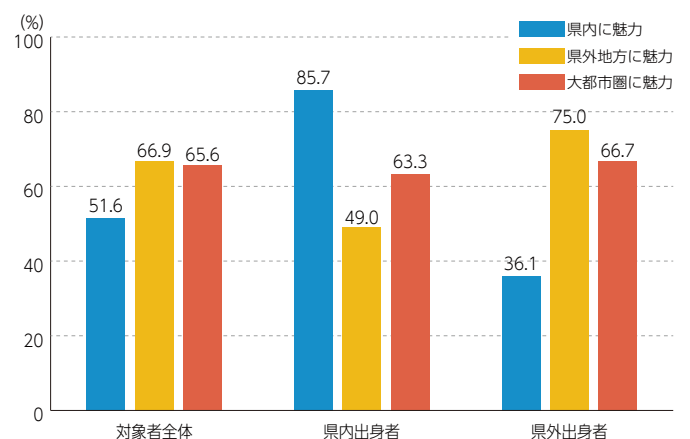


表1 県内出身者と県外出身者ともに自身の特性が生きる将来性のある安定した仕事

県内出身者		
1位	将来の安定を基準に就職先を選ぶ	95.9%
2位	自分の好きなことを基準に就職先を選ぶ	85.7%
	賃金を基準に就職先を選ぶ	85.7%
4位	得意なこと基準に就職先を選ぶ	81.6%
5位	生活のしやすさで就職先を選ぶ	79.6%
県外出身者		
1位	自分の好きなことを基準に就職先を選ぶ	89.8%
2位	賃金を基準に就職先を選ぶ	88.9%
3位	将来の安定を基準に就職先を選ぶ	87.0%
	得意なこと基準に就職先を選ぶ	87.0%
5位	生活のしやすさで就職先を選ぶ	83.3%

表2 県外出身者は都市部で責任ある地位につきグローバルに活躍できるかを重視

県内出身者を基準とした場合の 県外出身者が重視している項目	ポイント差
1位 関西圏・中京圏で就職先を選ぶ	23.3%
2位 地方の中核都市で就職先を選ぶ	19.6%
3位 首都圏で就職先を選ぶ	18.1%
4位 グローバルに活躍できる就職先を選ぶ	15.1%
5位 将来責任のある地位につくことができる就職先を選ぶ	14.0%

地域科目授業レポート

経済学部「地域再生論」：2017年7月14日（金）
人文学部「文化人類学実習3」：2017年8月23日（水）～25日（金）

地域課題解決科目 ● 経済学部「地域再生論」

第14回 地域づくりの実践に向けて④産学官金連携による地域再生への挑戦②
魚津三太郎塾 「地域課題解決をビジネスで」

ゲストスピーカー ● 魚津市役所企画総務部企画政策課地域資源推進班 前田久則氏
魚津三太郎倶楽部 島澤達也氏



学生を前に講演する前田さん

前田氏は魚津市について紹介した後、社会人を対象とした人材育成塾「魚津三太郎塾」について解説した。同塾は、地域の課題を企業の課題としてとらえ、企業の発展を図るケーススタディを実施することにより、地域リーダーを育成している。前田氏は、飲食店が売り上げの低迷という企業課題と、豊かな自然環境のPRという地域課題を解決するため、魚津の海産物を

使ったどんぶりを開発したことなどを挙げ「企業課題と地域課題は意外に整理できていない」と述べた。

島澤氏は、事業者のスタートアップの場所としてデスク、コピー、FAX、ネット環境を完備したコワーキングスペース「マチコ（machi-co）」について紹介。事業者同士が交流し、新たなビジネスを考える拠点にもなっていると「新しいビジネスは常に生まれている。それに対応する地域づくりを進めなければならない」と語った。



魚津三太郎塾について熱く語る島澤さん

地域課題解決科目 ● 人文学部「文化人類学実習3」



立山町の課題解決に向けたフィールドワークを実施

富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野の3年生10人は8月23日から3日間、立山町に滞在し、「五百石商店街の歩み」や「立山ブランド」など、それぞれが設定したテーマに沿って地域住民に聞き取り調査を行うなどのフィールドワークを実施した。

初日は同町役場を訪れ、舟橋貴之町長から町の観光資源などの説明を受けた。その後、学生たちはテーマごとに会いたい人

を訪ねたり、地元の図書館を利用したりして、テーマに沿ったデータを集めた。越中瀬戸焼に関心を抱く学生の福田さんは、地元の作家集団「かなくれ会」メンバーである陶芸家の加藤聡明さんにインタビューした。福田さんは「越中瀬戸焼の歴史は長く、土や薪を地元を求めるなど立山町に重きを置いて活動していることがわかった」と話した。

立山町は、学生から地域活性化策のアイデアを募り、実証実験する「立山町インターカレッジコンペティション2017」を実施しており、富山大学など8校が参加している。富山大学の学生は、提案書の提出、発表を経て、来年3月には実習報告書を刊行する予定。指導する藤本武教授は「現場に足を運び、直接話を聞くことで初めて得られるものがあることを学生たちに学んでほしい」とフィールドワークの重要性を強調した。



遠藤学長と学生が立山室堂散策

2017年8月6日(日)
立山室堂 他

「学生の立山・室堂見学～学長と立山に登ろう！～」は8月6日、立山室堂周辺で行われた。富山県に対する学生の愛着を育むことが狙いで、留学生20名を含む96名の学生が参加した。

当日は、室堂ターミナルから一ノ越への登山道中で天候が悪化したため、計画を変更し、立山博物館や立山カルデラ砂防博物館を見学した。学生からは「登頂はできなかったが、自然は美しかった」「雨天のコースも楽しかった。来年は雄山に登りたい」「博物館を巡って富山について知ることができた」などの感想が聞かれた。

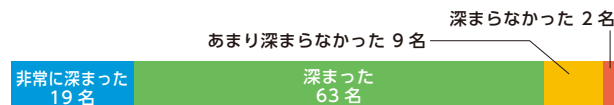


参加者のアンケート結果

Q. あなたの出身地(国・地域)を教えてください。



Q. 富山の魅力、富山への理解が深まりましたか。



※富山の魅力スポット(海、祭り、黒部ダム等)へ行ってみたいとの意見も多数あった



「合同企業訪問」コース別ミーティング

2017年9月15日(金)
富山大学五福キャンパス

大学コンソーシアム富山が主催する「2017 合同企業訪問」のコース別ミーティングは、富山大学五福キャンパスで行われ、同コンソーシアムに所属する県内7高等教育機関の学生231人が職場訪問研修に備え、ビジネスマナーや県内企業について理解を深めた。

富山大学就職・キャリア支援センター長の清水正明副学長が「訪問先で働く人々の姿をしっかりと見て、県内企業の魅力を学んで来てください」と学生を激励した。

続いて、株式会社「理想経営」の伊藤恵美さんが講演し、ビジネスマナーとして「思っていることを自然に相手に伝えられることが大切。敬意や思いやりの気持ちを行動で表しましょう」などと述べた。また、今回の訪問では調べればわかることは聞かず、効果的な質問を考えるべきだと指摘し、事前準備が必要であるとアドバイスした。学生は具体的な指摘を受けながら、社会人としてのマナーを学んだ。

次に、富山県商工労働部労働雇用課の廣瀬智範雇用対策係長が、女子学生限定の「就職応援カフェ」や、父母向け就職セミナーなど県が実施している就職支援事業について紹介した。

この後、学生は9月20、22日に参加する合同企業訪問のコースごとに分かれて企業研究を行った。22日に「銀行・保険コース」として北陸銀行と損害保険ジャパン日本興亜富山支店を訪

問するグループは、富山大学人文学部の竹村卓教授の指導の下、調べてきた企業の情報を交換し、聞いてみたいことなどを発表した。竹村教授は「就職活動は売り手市場といえども、全員が第一志望の企業から内定を得られるわけではない。積極的に取り組んでほしい」と話した。

合同企業訪問は、県内企業の魅力を知り、就業意識の向上を図ることが目的で、2013年から実施されている。専門分野や学年が異なる他大学の学生とともに事前学習を行い、実際の就業現場を見て、大学OBや県外から就職した若手社員との意見交換などを行う。今年は、9月20日に8コースに分かれて18事業所、22日に7コースに分かれて15事業所を訪問した。



とやま塾 in TOGA を実施

2017年9月12日(火)～14日(木)
南砺市利賀村(スターフォレスト利賀 他)

ALL 富山 COC+ の合宿型セミナー「とやま塾 in TOGA 2017」が、9月12日から14日まで2泊3日の日程で行われた。富山大学、富山県立大学、富山国際大学の学生12名が、南砺市利賀村の過疎問題、少子高齢化など地域課題に対する認識を深め、その解決策を探った。

1日目

「利賀村基礎講座」では、「瞑想の郷」の浦辻一成館長が利賀村と加賀藩との関わりや、硝煙、絹、林業など基幹産業の変遷を紹介した。利賀地域ふるさと推進協議会の野原宏史会長は、TOGA 国際芸術村を核としたクリエイティブビレッジ構想や、地域資源を活用した南砺市エコビレッジプロジェクトなどを説明し、山村留学や芸術家、都市部の学生、外国人観光客との交流をさらに拡大させたいと話した。

学生グループのテーマは、1班は「地域おこし協力隊による利賀の活性化」、2班は「利賀農業推進計画」、3班は「合宿地としての地域活性化」とした。夕食会には、南砺市の田中幹夫市長や富山大学の遠藤俊郎学長、鈴木基史理事・副学長、富山

県立大の石塚勝学長、富山国際大の中島恭一学長らが出席した。

2日目

富山県利賀芸術公園では、学生たちが野外劇場などスケールの大きい舞台芸術施設群を見学。世界の演劇人から「演劇の聖地」とも呼ばれるようになるまでの地道な取り組みなど、演劇や舞台芸術による成功事例を学んだ。

ネパール王国・ツクチェ村との友好のシンボルとして建設された「瞑想の郷」では、巨大な曼荼羅などを見学し、瞑想も体験した。「そばの郷」ではそば打ち、農家の畑ではウドの株分けに挑戦し、普段味わうことができない経験に笑顔を見せた。夜は、利賀で活躍する移住者との懇談会が開かれた。

3日目

学生たちが利賀地域の課題解決につながる成果発表を行った。地元住民も参加し、学生の視点から考える問題解決への糸口に耳を傾けた。閉塾式では、3大学長名による「とやま塾 in TOGA 修了証」が授与された。



学生の声

蛭田 哲也さん 富山大学 経済学部3年 岐阜県出身

利賀は、若い人や移住者の意見を取り入れてくれる風土があります。それを活かし、民間企業が農業に介入して、人口や働く場所が増えれば、「利賀モデル」を全国発信できると思います。

土屋 樹さん 富山県立大学 工学部3年 静岡県出身

単に「山奥の小さな地域」と思っていた利賀が、「活発な地域」という印象に変わりました。住民の強い熱意があり、支援体制が整った地域だからこそ、面白い発想を持った人が集まってくるのだと思います。

大崎 はるきさん 富山国際大学 子ども育成学部4年 富山県出身

住民との懇談会では「若い世代にもっと頑張ってもらいたい」という思いを感じ取りました。今回は他大学の学生と交流し、共に考える時間を持つことができ、とても刺激になりました。

主催者側のコメント

遠藤 俊郎 富山大学長

利賀という非日常の空間で、3大学の学生が同じ目線で考え、楽しみ、協働・交流できたのがよかったのではないのでしょうか。学生には、今後も新しいものに興味を持ち、挑戦していくことで、社会で必要とされる「リーダー」に育ってほしいと思います。

鈴木 基史 富山大学理事・副学長

地方創生の問題点は全国共通のテーマです。学生の試行錯誤の経験と、新しい発想で出された提案が、利賀、富山だけでなく、学生の故郷など全国各地の問題解決に活かされることを期待します。